



当時の漱石。宮島宿泊の前年、撮影した見合い写真(創藝社刊「漱石とその世界」=1955年刊=より)

130年前に虚子と1泊

宮島に魅せられた漱石 手紙や俳句、小説に記述

夏目漱石没後110年にあたる2026年は、彼が高浜虚子とともに宮島を訪れてから130年の年でもある。わずかに一泊しただけだが、大変印象深かったことが彼の手紙や俳句、短編小説などからうかがえる。近年、宿泊した日付や旅館が確実な資料などによって明らかになった漱石の宮島訪問の全体像を俯瞰する。

(富沢佐一「世話人」)

短編『一夜』創作の源か

「宮島にて紅葉に宿したる事など皆過去の記念として今も愉快なる印象を脳裡に留め居候」。同年12月、漱石が虚子に宛てた手紙の一節である。宮島訪問について彼が具体的に触れたのはこの手紙だけだが、彼が宮島に魅せられたのをうかがわせる。「紅葉」とは旅館「岩惣」のもう一つの商号だったことが、後述の通り、最近裏付けられた。

この年、彼は「廻廊の柱の影や海の月」の俳句を詠み、1914(大正3)年には「行く春や経納めにと厳島」の句も。また、小説『彼岸過迄』には「かねてから卒業したら母に京大阪と宮島を見物させて遣りたいと思つてゐた」の記述があり、後に韓国の太院君別荘を訪れた日の日記には「宮島の紅葉に水のない位なり」と書いている。



2026年(令和8年)
6月1日発行
「漱石と広島」の会

さらに、漱石が初の長編小説『吾輩は猫である』の連載中に執筆した短編『一夜』には、登場人物が語る夢として次のような記述が出てくる。「百二十間の廻廊があつて、百二十個の燈籠をつける。百二十間の廻廊に春の潮が寄せ中、海の中には大きな華表が浮かばれぬ巨人の化け物の如くに立つ……」。

厳島神社の回廊は百八間。釣り燈籠もある。宮島をイメージしたのは明らかだ。これについて、『坊っちゃん』と『明暗』などの著作がある広島市出身の川野純江さんは、人生の「夢」を思索していた漱石が学者から作家への転身を考えてた作品が『一夜』であり、宮島一泊が『一夜』の創作につながったと指摘している(川野純江「漱石と、広島と」)。

白木だった大鳥居や社殿

漱石が訪れた頃の宮島は、現在と大きく違っていたことがある。当時、大鳥居や社殿の色は朱ではなく、白木だったのだ。明治新政府は旧体制を仏教が支えていたのを一新するため、全国の神社から仏教色を排除するよう指令。厳島神社に対しても社殿の朱の色が「仏教式」として、「焼き払え」との命令を出したとされる(「神仏分離資料」)。

神社側の必死の嘆願で社殿の焼却は免れたものの、朱の色は海の砂でそぎ落とさ



大鳥居が白木として描かれた1895(明治28)年の錦絵。社殿は朱に描かれているが、見栄えをよくするためか。(松本洋二さん所蔵)

れ、大鳥居は1875(明治8)年に再建された時から白木のまま。漱石の手紙や俳句、小説のどこにも「朱色」と書かれていないのはそのためであろう。大鳥居や社殿が朱色に塗られたのは1902(同35)年以后という。

ここに紹介した1895(同28)年作の錦絵(松本洋二さん所蔵)も大鳥居は白木として描かれている。ただ社殿には朱が施されているが、錦絵は見栄えをよくするため、実際とは異なる書き方をしたことがよくあり、この絵もそうだったと考えられる。今年4月、中国新聞で報道された明治の屏風絵では大鳥居、社殿とも白木で書かれている。

岩惣の宿帳コピー裏付けに

前述の通り、漱石は宿泊した旅館について「宮島にて紅葉に宿したる……」と書いているだけで、紅葉がどの旅館を指すのか明確ではなかった。また、宮島に宿泊した日付は